琉游舎

アトリエ琉游舎だより 147号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年2月15日発行

春疾風 春荒 春一

（はるはやて） （しゅんこう） （はるいち）

○立春後に初めて吹く暖かい南寄りの強風を気象庁は春一番と呼んでいます。気象庁によって定義される前は、この強風は、地方ごとに春疾風　春荒　春一などと呼ばれていたようです。

○春一番という語感は、北風の厳しい寒さの冬から解放されて、穏やかな春の到来を思わせるものがありますが、実はこの言葉のルーツは江戸時代に壱岐の漁民が見舞われた海難事故にあります。私は昨年の秋、九州壱岐の郷ノ浦港を訪れた時に、この事故の供養塔を見て、初めて、春一番の言葉の意味とそのいわれを知ることとなりました。

○安政６年(1859年）2月、長崎県五島沖に出漁した壱岐の郷ノ浦の漁師53人は、春先の強い突風にあって遭難、全員、水死してしまいます。このとき以来、春の初めの強い南風を春一番と呼ぶようになり、当地では今日でも事故当日の2月13日には出漁をみあわせ、「春一番供養」を行っている。とその供養塔の説明文に書かれていました。

○いろいろな名称で呼ばれていた春の嵐を「春一番」と最初に公に呼んだのは民俗学者の宮本常一のようです。昭和34年に出版された『俳句歳時記』の編者に関わった宮本は「壱岐で春に入り最初に吹く南風をいう。この風の吹き通らぬ間は漁夫たちは海上を恐れる。」と解説しています。その後報道や天気予報で頻繁に使われて、定着するようになりました。

○春一番、鶯の初鳴き、梅や桜の開花と春の訪れを待ち望む私たちですが、季節の変わり目はまた空気の流れが変わるときでもあります。疾風のように春一番が駆け抜けると、ある時は大きな災害をもたらすこともあれば、春のぬくもりを感じてほっとした気分にもなるものです。立春になってまだ日が浅いこの頃ですが、狸が巣穴から出て徘徊したり、猪の足跡を見かけたり、自然も春が待ち遠しいかのようです。

2・3月スケジュール

月	火	水				
			16 映画会 13時半	17	18	19
20	21	22	23 映画会 お休み	24	25	26
27	28 読書会 13時半	3月1日	2 映画会 お休み	3	4	5 写経会 13時半
6	7	8	9 映画会 13時半	10	11	12
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 13時半	17	18	19
20	21	22	23 映画会 お休み	24	25	26

写経会
3/5(日）13時半

読書会
2月28日
3月14日
（火）13時半

活動再開
2ヶ月ほど休止していた琉游舎の活動を再開しました。皆様のお越しをお待ちしています。

狂言綺語…六根清浄

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

2月に入ると急に空気の流れが春めいたと感じるのは、立春を過ぎて私の気持ちが春を待ち望んで急いているばかりではなさそうです。まだまだ寒い日も多いのですが、このところ狸の姿を見かけるようになりました。狸には冬眠をする習性がないようですが、真冬は活性が鈍り餌も少ないので、巣穴でおとなしくしていることが多いと思われます。しかるに自然の推移に敏感な夜行性の狸が、このところ餌を求めてでしょうか日中から人目につくところを歩き回っています。暦の上での春とはいえ、まだ生き物には実質的には冬です。季節の推移を目や耳や鼻で感じ取る機能が劣化してしまった私たち人間は、天気予報を聞いて生活の目処を立てていますが、自然界では経験と本能だけを頼りに生きていかねばなりません。野生の生き物が季節の推移を掴み損ねると命取りになるのです。えさを求めて狸が姿を晒すのは、私たちの目に届かぬコリーナの山中で、狸や狐や兎や鼬鼠や猪が生死をかけた少ない食料の争奪戦を繰り広げているからなのでしょうか。

自然の中で生き抜いていくために、生き物たちは先祖から引き継いだ生存本能の記憶と己の身体機能を総動員しなければならないはずです。**眼**に見えるもの、**耳**に聞こえるもの、**鼻**がかぎ分けるもの、**舌**が選別し声が及ぼすもの、そしてそれを判断する**意**識を生存のための行動に変える**身**体能力を駆使することで、彼らは種を次につなげようとしているのです。彼らの生存の目的はいかにして個体のいのちを次に繋げ種を保存し続けるかにあります。彼らにとって生きることは生存競争であり他者との戦いに勝つことなのです。私たち人間も本来は生き物の一種ですから、本能の根底には生存競争があります。人間は早々に文明を手に入れて他の種との生存競争に勝利を収め、自然界の生き物の頂点に立つようになりました。すると今度は族間の生存競争が始まってしまったのです。家族、一族、氏族、部族、民族などの族間の競争を生き抜くために、人類は宗教や法律を発明し、社会を形成し時には戦いを、時には平和を選択して今に至りました。その過程で人は眼耳鼻舌身意の認識機能を生存競争のためだけでなく共存のために使う思想を持つようになりました。

法華経法師功徳品第19に「受持是法華経　若読　若誦　若解説　若書写　是人当得　八百**眼**功徳　千二百**耳**功徳　八百**鼻**功徳　千二百**舌**功徳　八百**身**功徳　千二百**意**功徳　以是功徳　荘厳**六根**　皆令**清浄**（この法華経の教えを信じて忘れず、読み、人々に唱え、解説し、書写したならば、この人は、百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意の功徳を得るだろう。この功徳によって六つの感覚器官を飾って悉く浄らかなものとするのである。）」という経文があります。法華経を信じ人々にその教えを広めその通りに行えば六根清浄となり、功徳が得られるであろうという教えです。六根は感覚器官とその器官がもっている能力のことで、「眼・耳・鼻・舌・身・意」のことです。この六根は人間の認識の根幹です。一方これが苦の原因である欲や迷いや執着などの煩悩をもたらします。この六根を執着から遠ざけて清らかで汚れのない状態にすれば、功徳を得て悟りへの正しい道を歩み続けることができるのです。この六根清浄による正しい認識・判断・行動の結果として、種々の功徳があげられています。眼根清浄は善悪美醜を見分ける力が備わり、耳根清浄はあらゆるものの声を聞き分けることが出来その声の喜怒哀楽を共感できる力が備わり、鼻根清浄は香りの善し悪しを嗅ぎ分ける能力が備わります。舌根清浄は美味しく味わう能力と口から出る言葉で人の心を動かす能力が備わり、身根清浄は人に尽くすことに生きがいを感じられ清らかな身体が備わり、意根清浄は感謝と慈悲の心、善悪を正しく判断する心が備わり、厳しさと優しさを備えた強い心の持ち主となれるのです。この六根清浄の功徳で、私たちは六根を己の種の保存のためだけでなく、種間の共棲のために使い、競争ではなく平和な社会の実現を可能としているのです。

仏教は自己の救済（悟り）を目的としています。大乗仏教の思想が「自利利他」、つまり「自らの仏道修行により得た功徳を自分が受け取るとともに，他のための仏法の利益をはかること」にあることは間違いないのですが、他者の救済が究極の目的ではなく、社会の関係性の中で生きている限りは他者の救済がなければ自らの救済も不可能であるという思想が根底にあります。個人の六根清浄への願いと行いの総和（正法）が他者に功徳をもたらすと法華経を色読して、そのままに実践を行った日蓮聖人の教団は未だにその実践を成就することができていません。自己の六根清浄が集まって社会の六根清浄を実現すること（自利利他）の困難さがここにあります。共存のための六根が対立のためのものにいつでも変わりうるのです。六根は煩悩を製造し苦をもたらします。しかしその六根を清浄すれば煩悩が消え安らぎの道へと進むことができるのです。誰でも六根清浄を願いそうあろうと試みることは可能です。元来仏教では六根清浄は厳しい修行によって獲得されると考えられていました。しかしそれをどうやって獲得するかは、私は自己の日々の生活のありのままの姿に負うていると考えています。ありのままに観てありのままに行う、六根を己の判断で機能させるのではなく、宇宙の存在そのもののありように任せて六根を働かせること、これが私の六根清浄です。

六根清浄は仏教の世界では難行の道であり、能力のすぐれた人の努めるところである。注1と言われています。そうであれば私には無縁の教えとなります。仏教は生死一如ですが、それは生があり日常があるからこその生死一如であると、私は再誕以後その思いをさらに強くしています。大いなるものに身を預け、そのはからいのままに、ありのままに観て、ありのままに行うとき、私の六根は自ずから清浄になっているはずです。仏教は特別な修行や思想の中にあるものではありません。毎日のあたりまえの日常の中に営まれる私と他者との関わり合いの中に自ずから立ち会われて来るものなのです。

注１：歎異抄第15章

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319ー17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp